

下野市立南河内小中学校

1 学校課題

主体的に表現し、伝え合う児童・生徒の育成

～対話に必要な表現を身に付ける授業の創造と全教育活動での実践を目指して～

2 研究計画

(1) 主題設定の理由

昨年度まで南河内中学校区では、「主体的に表現し、伝え合う児童・生徒の育成」を研究課題に設定し、コミュニケーション力の育成に向けての推進研究を進めてきた。人と「つながる」ためには、コミュニケーション力は不可欠であり、言葉の力は思考力や感受性を支え、全ての教育活動の基盤となるものであると考え、授業や行事などの様々な場面で取り組んできた。

義務教育学校としてスタートした今年度は、各校で積み上げてきたコミュニケーション力をもとに、主体的に表現するために必要な「伝える力」をさらに向上させることを目指す。その実現には、まず全職員が「目指す児童・生徒像」を十分に共通理解し、同じゴールに向かって研究を続けていく必要があると考える。

そこで、本年度のサブテーマを「対話に必要な表現を身に付ける授業の創造と全教育活動での実践を目指して」とし、昨年度までの各校での成果と課題をもとに、義務教育学校のよさを生かしながら、全教育活動でのコミュニケーション力の育成に力を入れていきたい。

(2) 研究の仮説

次のような取組を進めていけば、主体的に自分の考えや思いを表現できる児童・生徒の育成につながり、コミュニケーション能力が向上するであろう。

- ①小中一貫教育を意識した系統的な指導を実践する。
- ②主体的に自分の考えを表現し、伝え合える様々な場면을意図的に設定する。
- ③授業を通して、自分の考えを広げ深め合うために必要な言語力、表現力を身に付けさせる。
- ④児童・生徒の活動意欲が高まる課題、教材、学習形態等を工夫する。

3 研究内容

本年度は、義務教育学校のよさを生かしながら、全職員で「目指す児童・生徒像」の共通理解を図り、系統的な指導の実践や学び合う教員集団づくりを目標とした。

(1) 小中一貫教育を意識した系統的な指導の実践

①9年間を見通した学びの系統的な指導の研修

ア視点を明確にした研究授業の実践を行うために、前期課程と後期課程の職員合同での指導案検討や研究協議を行った。

イ学び合う教員集団をつくるため、授業公開期間（全クラス公開）を設定し、学校課題との関連（視点）をもとに、前期課程と後期課程の職員で参観し合った。また、参観した授業の研究協議を通して、児童・生徒同士の言葉をつなぐ教師のコーディネート力の向上について研修を深めた。

②目的を明確にした対話活動の充実

ア昨年度までの各校の取組を生かすとともに、目指す児童・生徒像を明確にし、互いの知見や考えを伝え合い議論したり、協働したりした。それにより自身の考えを広げたり、深めたりできるような場面を設定するなど、表現力を高めるための効果的な言語活動を工夫することができた。

イ特別活動や異学年間の交流を通して、目的に応じたコミュニケーション活動を行った。話しやすい雰囲気や他者の意見を受け入れる雰囲気づくりを工夫することで、発表することへの抵抗感をなくすことができた。



ウ行事や集会、1分間スピーチ等で原稿を見ない（ノー原稿）で発表することで、話すことへの自信をもたせた。

(2) S&Uコラボ事業研修会を通じた主題への取組

①講師を招聘しての職員研修

月日	対象	講師・講話	講話内容
8 / 1	職員	宇都宮大学共同教育学部 教授 日野 圭子 先生 『コミュニケーション能力 育成の視点からの授業改善』	○子どもの考え合う力を育てる視点、主体的・対話的な活動を通して学びを深めていく授業づくり。 ○コミュニケーション能力の育成には、児童・生徒だけでなく、そこに教師も加わって学び合いをすることであり、日頃の授業を通して、考えを学び合う文化の創造。

②研究授業（授業研究会）

月日	学年・単元名	課題追究のための手立て等
9 / 21	3年 算数「円と球」 	○様々な具体物（教材）を用いて、課題への関心を高める工夫。 ○個人→グループ→全体と段階を踏みながら伝え合うことで、自分の考えをより広げたり深めたりする場の設定。
11 / 21	8年 数学「平行と合同」 	○既習事項の提示やICTの活用を通して柔軟な思考を高める工夫。 ○相手意識をもった話し合い活動の工夫。

4 本年度の成果と課題

義務教育学校元年であり、前期課程と後期課程全職員で学校課題の追究に向けた取組を考え、共通理解のもと研修を進めてきた。

(1) 研究の成果

- ①義務教育学校の特色を生かした系統的な学習指導の工夫・改善について、教師側の意識を高めることができた。
- ②意欲を高める課題・教材の設定や学習形態の工夫を通して、言語活動を充実することで、児童・生徒の「話したい」「発表したい」という意欲を高めることができた。
- ③異学年間の交流を通して、目的意識や相手意識をもたせたコミュニケーション力の育成を図ることができた。

(2) 研究の課題

- ①児童・生徒同士で言葉のキャッチボールができるように、教師のコーディネート力をさらに研究し、改善していく。
- ②よい聞き手を育てることや、「まとめ方」として、自分と他者の考えを比較・検討し、その後に序列化、統合化、構造化などを通して自己選択の場を設定していく工夫など、今後も研究していく必要がある。
- ③「考えたい」「話したい」という児童・生徒の姿を、教師側がどうイメージしていくか、日頃の授業から常に意識していく。
- ④自分の考えを深め合うために、その土台となる基礎基本の力の強化や集中して学習に取り組む態度の育成が必要である。